

公園をみる・観る

= ツバメ =

今年もツバメがやって来て、公園入り口の男子トイレの手洗いの上の電気の笠に巣を作った。現在 5 個の卵を温めている。

ツバメは古い昔から人間と親しく共生関係にあった。特に農耕民族の日本人にとって彼らは農作物に付く昆虫を捕食する益虫であり、ツバメも人間の側で営巣すれば外敵から身を守ってもらえる。人間が洞窟生活をしていた頃、すでにツバメも洞窟内に住んでいたらしい。日本最



古の物語と言われる「竹取物語」では、かぐや姫に求婚した石上中納言は「燕の子安貝」を持って来れば結婚をOKするとある。子安貝は、ひとつの家に 10 年くらい営巣し続けたツバメが、お礼にと巣のなかに置いていくという貝殻のことで、貝殻の中には黄疸の薬が入っていたらしい。お礼の印として金の玉を置いていくと言う伝説もあり、ツバメは縁起の良い鳥、田の神の使いとあがめられた。

そんな昔から人と共生しているツバメの日本での生活は、最初は子育てに忙しい日々が続く。日本に来るとまず巣作りにとりかかる。去年使った巣を補修して使うカップルも珍しくない。やがて 1 日 1 個ずつ卵を産む。卵は主に雌が抱卵する。雄は天敵（ハシボソカラス、ハヤブサ、ツミ、ヘビなど）から家族を守る大事な使命を持っている。雌にとっても採餌や水飲み時などのピンチヒッターとして頼りになる存在である。卵が孵化すると雛への給餌活動が始まる。給餌回数は頻繁で 15 時間弱の間に 450 回したとの記録もあり、都会ではネオンの広告塔の灯の下でも採餌作業を続けるという。かれらには労働基準法の適用はないのだ。ヒナは巣立ちが近づくと羽ばたきの練習をはじめ。巣立ちの日、親ツバメは持ち帰った餌を巣の近くでヒナに見せびらかすように振る舞い、空腹に耐え切れなくなったヒナは親の側に飛んで行き、親はご褒美のように餌を与える。巣立って 10 日位するとヒナも自分で餌を捕食できるようになり、他の幼鳥と巣の周辺域で群れて暮らす。季節の最初に生まれ巣立った幼鳥を一番子と呼ぶ。一番子が巣立つと一部の親鳥たちは再び繁殖活動を始める。これを二番子と呼び、7月中には二番子も巣立ちを終える。その年に生まれた幼鳥と親鳥は昼間は一緒に河川、湖沼、水田などの水辺でユスリカやトンボなどを捕食し、夜になるとアシ原に集まりアシの葉に止まって休む。日没後、数万羽のツバメたちが一斉にアシ原にもぐりこむ様子は壮観である。公園では 8 月 5 日（土）18 時から「ツバメのねぐら入り観察会」を計画しているので是非ご鑑賞あれ。人生観が変わるかも（ちょっとオーバー）。8 月上旬の渡りが始まるまでツバメたちは、それまでの忙しさを忘れたこのようにのんびりと暮らす。ツバメは野鳥の中でも育雛の様子を観察するには最適な鳥で、命の尊さについて学ぶには好教材とされているが、近年、住宅様式の変化に伴いツバメの営巣場所が減少してきている。同じ理由で営巣場所に窮したスズメがツバメの巣を横取りするという事件もあり、どちら様も生活環境はお辛いようだ。

（土×土）

